

第 26 回 日本 IVF 学会学術集会

P-16

大阪, 2023.11.03-04

胚移植直前の胚盤胞拡張度は妊娠成績に影響を与えるか？

関藤 孝昭、尾形 龍哉、富田 和尚、幸池 明希子、宮本 有希、森本 義晴
医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

胚盤胞凍結融解胚移植において、当院では胚移植当日の午前に胚を融解し、約 4~5 時間の回復培養した後、胚の拡張度を確認してから胚移植を実施している。

胚移植直前の胚の拡張度は様々であり、今回、拡張度の違いが妊娠成績に影響を与えるかを後方視的に検討した。

【方法】

2018 年 11 月から 2021 年 12 月までに胚移植時年齢 39 歳以下で凍結融解単一胚盤胞移植を実施した 589 周期を対象とした。TE が透明帯ちょうどまで拡張した状態を拡張度 100% とし、収縮状態では透明帯直径に対する TE の直径割合、ハッチング状態では全細胞中半分の TE がハッチした状態を 150% と目安にし、各胚 10% 刻みで拡張度の評価を行った。胚の拡張度が 90% 未満 (A 群: 49 周期)、100% (B 群: 46 周期)、110~140% (C 群: 284 周期)、150% 以上 (D 群: 210 周期) の 4 群に分け、各群の臨床妊娠率を比較した。

【成績】

臨床妊娠率は A 群で 32.7%(16/49)、B 群で 43.5%(20/46)、C 群で 50.0%(142/284)、D 群で 53.8%(113/210)であり、A 群と比較して C、D 群では共に有意に高かった($p < 0.05$)。

【結論】

胚移植直前において収縮状態にある胚では、ハッチング状態の胚と比べて妊娠成績が低下したことから、胚の拡張度が妊娠成績に影響を与えることが分かった。収縮状態の割合が増加した際は、凍結融解手技や試薬の見直しの必要があると考えられる。